

# NEW GENERATION CLIMBERS

#008

## 土肥圭太

KEITA DOHI

森山憲一=文・写真



「考えて登る。クライミングはそれが楽しい」



### PERSONAL DATA

出身地 神奈川県平塚市  
生年月日 2000年10月17日  
クライミング歴 10年

#### 主な戦績

2018年 リード日本選手権3位  
2017年 世界ユース選手権ボルダリング2位  
2016年 世界ユース選手権ボルダリング1位

#### 最高グレード

ボルダリング2段、リード5.13c

#### ホームジム

3RD WALLY 辻堂  
<https://wallysan.jimdo.com>

### 細

身でシュッとした高校生が現れた。やさしい表情で、口を開くと、理性的かつおだやかな語り口。着ているTシャツこそ若干攻撃的なデザインだが、スポーツ選手という印象は薄い。体育会系というより文化系。吹奏楽部などにかにもいそうなタイプだ。

「ランジとかパワー系のムーブが苦手なんです。どうやったら効率的に登れるか、考えて考えて、テクニックで解決していくタイプだと思います」

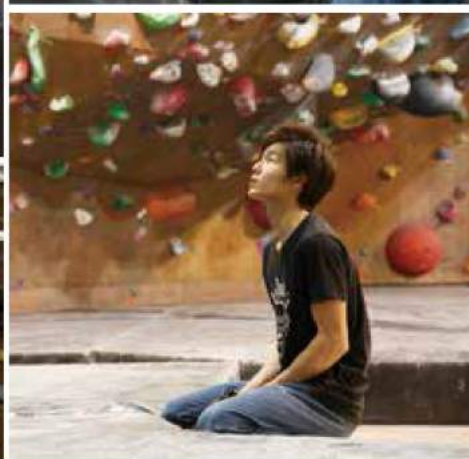
クライマーとしての自分をそう分析。この年代にありがちな「おれがおれが」感がなく、むしろ第三者目線で自分を語る。「頭脳派クライマーですね」というと、「そうなんですかね」と恥ずかしそうに笑う。

一般的なイメージからするとクライマーらしからぬこの17歳の少年が、しかし、高校生最強と目されるクライマーなのである。これまでの高校生ナ

ンバーワンは、ワールドカップで2位にもなった榎崎明智さん。この春に卒業を迎えた榎崎さんに続く次代のホープとして、だれもが名前をあげるのが、この人、土肥圭太さんというわけだ。

この数年で急成長を果たした土肥さんのブレイクのきっかけとなったのが、2015年にイタリアで行なわれた世界ユース選手権。このとき14歳。ユースBという年代クラスで2位に入った。翌年は、榎崎明智さんや原田海さんなど、年齢が上の強豪と同じユースAというクラスに上がり、「ここでは勝てないな」とあきらめていたというが、結果はなんと1位。自分より格上と感じていた榎崎さんや原田さんを上回っての世界大会優勝だった。

ユース大会だけではなく、オープンクラスのシニアの大会にも出場。ボルダリング、リードともに年を追うごとに着実に順位を上げてきた。この3月に行なわれたリード日本選手権ではつ



左) ふだんは華奢でおとなしそうな土肥さんだが、壁に入るとこの迫力。右上) ムーブを起こす一瞬も、ふだんとは目つきが変わる。左下) 愛用シューズはマッドロック。上級モデルのほか、「レモラ」というオールラウンドモデルも本気シューズとして使用。「これが最高なんです」 下中央、右下) 課題を登る前のオブザベーション。手順をじっくり見極める。これがなにより重要なのだという

いに3位。もはや国内トップチームは完全に射程圏内に入った。

成長の秘密を聞くと、土肥さんはひとりの師匠との出会いをあげた。

「室岡照吾さんに教えてもらったことが大きかったです。ずっと自己流でクライミングをしていたんですが、室岡さんが効率的な登り方とかトレーニングの方法とか、体系立てて理論的に教えてくれたんです。室岡さんに教えてもらうようになってから、ぼくのクライミングは明らかに変わりました」

室岡さんは、東京・八王子でロックビーンズというジムを運営するクライマー。神奈川県平塚市に住む土肥さんは、ホームとなるジムをとくに定めず、あちこちのジムを転々と登っていた。小学校1年のときにたまたま体験したクライミング。両親もクライミング経験があったわけではなく、教えてくれる人はいないままに、よいと思うことを自分で考えて行なう我流で続けてき

た。それだけでも一定の成績を残していたのは才能のなせるわざといえるが、室岡さんのもっと広い視点と経験に基づく、筋の通ったメソッドを土肥さんに伝授。これがずばりはまったらしく、才能は本格的に開花した。

「クライミングって囲碁に似ているところがあると思うんです。目の前には、何十通り、何百通りの手順があって、そのなかからひとつの正解を読み取らなければいけない。体を鍛えるだけじゃなくて、考えないと登れないところが、クライミングの奥深く、楽しいところだと思っています」

クライミングは、身体機能が試される場であると同時に、先行きを読む頭脳ゲームの側面もある。17歳の若きホープは、そこにより強い魅力を感じているというのだ。頭脳派クライマーという印象は間違っていなかったか。だからこそ、室岡さんの筋道立った指導もフィットしたのだろう。

今後の大きな目標としては、やはり東京オリンピックになるのだろうか。そう聞くと、意外な言葉が返ってきた。「もちろん、出られるなら出たいです。……でも、ぶっちゃけ、無理だと思っているんです」

オリンピックに出るためには前年に代表に決まっている必要があり、そのためには前々年、つまり今年にワールドカップで活躍していないといけない、自分はまだその位置にいない、ということ、土肥さんは理路整然と語った。「がんばります！」というステレオタイプなコメントを期待していた浅はかな取材者は、一本とられた格好だ。

これまで土肥さんは、こうした冷静な現実分析観を力に変えて結果を残してきた。これまたスポーツマンらしくらぬ後ろ向きなコメントかもしれないが、結果がすべてだ。言葉は小さく見えても、また大きなことをやってのけてくれるのだろう。